

【佳作】

まず自分が変わる

青木 友香（東京都 学習院女子中等科 1年生）

「うわあ、どうしたらいいの。」

先日、母と買い物に出かけ、一人でレジに並んでいた時の事だ。隣にほろろが肌が見えないほどいっぱいある人が並んでいるのに気がついた。一瞬のうち頭に浮かんだのは、移る病気だろうかという事で、次には、そんな事を考えてしまった罪悪感と、何とかして見ないようにして平静を保たなければいけないという事だった。会計が終わると、私自身は普通の態度で、でも内心は急いで母の元へ戻った。母はすぐに私の様子がおかしい事に気づき、何があったのか聞いてきたので、私はありのままを話した。すると、母は少し黙った後、こう言った。

「ワンダーを読んで感動し、心に残った事は、どうしたの。」

私はハッとして、言葉が出なかった。「ワンダー」を読み、主人公のオギーを学校でペスト菌扱いする人達を何て嫌な人達だろうと思ひ、私はこんな事は絶対にしないと母に話していたのだ。おそらく私を含め多くの人は、オギーや私が会ったような人と出会った時、どうすればいいかと聞かれたら、嫌な気持ちを持たず、普通に接すると答えるだろう。しかし、思ったり言うのと、その場になって実行するのは違ったのだ。その事を痛感し、もう一度

本を読み返し考えてみようと思った。

私はオギーと似ているところがあると思っていた。私も幼稚園児の時、手術をした事があり、その時の辛さやこわさ、心細さを覚えていた。また、友達とうまくいかず学校に行きたくなくなる気持ちもわかると思っていた。

小学生の頃、私は長縄がとても苦手だった。どうしても皆のように跳ぶ事が出来ず、ひっかかってばかりいた。そんな時、クラスメイト達の記録が伸ばせない怒りや、かわいそうに思う同情の視線が辛かった。とにかく自分の無様な失敗をジロジロ見られている気がして、嫌で嫌でたまらなかつた。だから、オギーのじつと見られてさっと目をそらされる事を悲しく感じる気持ちがわかつた気でいた。でも、私の長縄の時に感じる屈辱とオギーの受けている日々は、オギーとヴィアの「いやな一日」の違いのように全然違うと思ひあたった。オギーは自分が普通だとわかっているのは世界中でばくただ一人と思っていて、そんな底なしの辛さを全部わかつたと考えるのは、うぬばれだった。

私はサマーにとっても憧れる。オギーの事をかわいそうと思ひ、同じテーブルに座る素直な優しさに胸を打たれたからだ。私だったら、かわいそうと思っても、大きなお世話かなとちゅうちよしたり、他の子が気になり動けないだろう。自分も仲間はずれにされそうな状況であれば、なおさらだ。結局、かわいそうと思っても何もしないのであれば、サマー以外の私が嫌だと思つた子達と同じという事だ。サマーにとっては、素直な気持ちを大事にした当たり前の行為なのだろう。もし、サマーと出会えたら、とても澄んだ目で、まっすぐに私の目を見て話しかけてくると思う。その視線は簡単には、周りの子や悪意に惑わされず、たとえ心が揺らいでも、自分の思いに正直でいる事を選択するのではないか。

オギーが産まれる時にいた看護師さんの一人は、障害を持つオギーが産まれ、医者ですら気絶した時に本質が見えてくる。いざとなった時、その人の内面の美しさがわかるのだと深く感じた。

私は最初に読んだ時、秘書のミセスGはオギーとの初対面の時に彼が苦手な愛想笑いをするような態度をしたので、ひどいと感じた。しかし今は、私は彼女に似ているのではないかと思う。悪い人ではないが、実際にその場にたつとつい目をふせてしまう。そして自分の内面の動きをごまかすように立ちふるまう。そんな彼女の心をもオギーは動かした。彼が受賞した時、彼女はぼろぼろと泣いた。それは一年を通し、彼女の中でオギーが外見など関係なく、ただ大事で誇りに思える生徒に変化し、心から感動したからだろう。

オギーは他人からの悪意、自分の中に湧き上がる嫌な気持ちに打ち勝っていく。時に戦い、時に自分を変える事により相手を変えていく。彼は完璧ないい子ではない。だが、一生懸命ひたむきな姿や個性で、相手の心を動かす力を持っている。だからこそ、友達を全員失ってまでの友情を育むジャックやサマーだけでなく、エイモス達をも変えていくのだ。

他人の悪意に負けない事は大切だ。なんとか道を探し続けたいといけない。しかし、自分の中の悪意にも勝つ強さを少しずつでも見つけたい。いきなりサマーのようになれずとも、心を柔らかくミセスGのように変わっていききたい。いつかその場で実行できるように。

青木友香の格言 相手ではなく、まず自分が変わる。そうする事で相手をも動かす事が出来るかもしれない。そう、オギーのよう。

書名…ワンダー
著者…R・J・パラシオ